

扇状地の再開発

平安時代の終り頃から鎌倉・室町時代になると、在地領主層が荒廃していたかつての田畑を再開発し、また新たに土地を開発して力を持つようになり、武士団を形成するようになります。

富奥では、栗田遺跡や三納^{さんのう}ニシヨサ遺跡等から集落の跡が見つかっています。

集落内には建物が点在しており、散居村的な風景であったようです。遺跡からは土師器皿や、越前焼、加賀焼、珠洲焼^{すず}の甕^{かめ}、壺^{つぼ}、搦鉢^{すりばち}を中心に、瀬戸焼、中国製の青磁碗^{せいじ}や青花碗^{せいか}などの陶磁器や、砥石^{といし}、銭貨、鏡などが出土しています。



石礫の中の集落跡（三納ニシヨサ遺跡）

石礫のない土地は農地として利用されたと考えられます。